

ボゴタは自転車に乗って

小里 仁

2014年3月末から1年間、コロンビアの首都ボゴタにある日本語学校で日本語を教えた。私を含む日本人教師4人（正確に言えば1人はアルゼンチン国籍の日系人）に対し、学習者は65人～80人程度。大半が高校生や大学生で、弁護士や会社勤めの社会人も少し混じる。授業は平日の夕方や土曜日で、数人が机を囲む少人数のクラスだ。ブラジルやペルーなどと違い、日系人の生徒はほとんどいない。なぜ日本語を勉強する気になったのか。尋ねると、多くはアニメ、マンガ、ポップスなど日本のサブカルチャーに興味を持ったことがきっかけだという。『セーラームーン』『ナルト』『進撃の巨人』…。日本に留学して医学を学びたい、ソニーで働きたい、などと答える若者もいた。

サムスンのスマホを片手にYouTubeで『進撃の巨人』の主題歌を拾ったり、インターネットで辞書を操って漢字を探したり、日本語アニメに出てくる、「おまえ」などのあ

まりお勧めできない言葉遣いを真似たり、と彼らの日本語の接し方、入手する日本の情報はこちらの予測を超えていた。学生たちにメイド喫茶に連れて行かれたのには驚いた。まさかボゴタにまで進出しているとは…。

学校は市北部にあり、はじめの1ヶ月は歩いて10分ほどの生徒の家族が住むマンションの一室を間借りした。慣れたところで学校が不動産屋を通じて見つけた家賃2万円ほど（学校負担）の部屋を借りることになった。いざ住んでみると騒音に安眠を妨げられたり、家主の都合が悪くなったり、学校側が家賃負担を減らしたかったりで、結局3回引っ越し、1年間に4つの家に厄介になる羽目になった。少しずつ北から南方向へ、そして最後は空港に近い西寄りに移った。おかげで「北に富める者が、南に貧しいものが住む」というボゴタの抱える南北問題を実感することができた。

引っ越しにより通勤距離が伸びた

ので、トランスミレニオ（後述、専用レーンを走る公共の大型連結バス）などを利用したり、自転車で通ったりした。

自転車店へは、コロンビア人である同僚の夫が「安いところを知っている。値切ればもっと安くなる」といい、ある日曜日、連れて行ってくれた。場所は30kmほど離れた南部のアルケリア、軒並み同商売で所狭しと自転車が並べられている。そこで折り畳み式の小径車と付属品一式やヘルメットを買い、乗って帰った。

ボゴタは大変な車社会である。概して運転は荒く、スピードは目いっぱい出す。方向指示器を出さないで車線変更をするのは日常茶飯で、しかも道路はでこぼこ。雨が降れば、水たまりがあちこちにでき、歩道にまで勢いよく泥水が飛んでくる。信号機は車のためで、歩行者用のものは少ない。大きな道路を横断するときは、大げさでなく命がけだ。

ところが、日曜日にはありがたいことに、そんな道路の多くが



ciclovía (自転車天国) になる。だからその日はやや遠回りとなったものの、家まで約 50km、ずっと自転車専用道を通してサイクリング気分で行くことができた。

(話はそれるが、コロンビアは知る人ぞ知る、ラテンアメリカの自転車王国である。滞在中、ツール・ド・フランス、ブエルタ・デ・エスパーニャと並び称されるロードサイクルレース、イタリアのジロ・ディタリアでナイロ・キンタナが優勝し、2 位にも同じくコロンビア人が入って上位を独占した。テレビは「歴史的快挙」と大きく報じ、国民は快哉を叫んだ。)

Ciclovía は日曜・祝日の朝 7 時から午後 2 時まで。運動不足解消のため、よく利用した。総延長 121km。主要道路をつなぐルートを走れるため、北から南、東から西へと市域の端から端まで行ってみた。ボゴタの標高は 2640 m。立派な高地トレーニングになるが、幸い平坦な道ばかりで息が上がることはない。ジョギングする人、スケートボードを楽しむ人、家族や友人とゆっくりと散歩する人。本格的なロードバイクも、4 人乗りの貸自転車も。解放感で満たされた非日常的などかな空間を思い思いに行き来している。一角を区切って開かれる「自転車学校」で

運転を習う子どもたちもいる。

市民に混じって「policia」と書かれたチョッキを着た警官も 2 人 1 組でペダルをこいで巡回し、「行け (SIGA)・止まれ」と表裏に書かれた団扇を回して交通整理をする高校生のボランティアがいる。そろいの制服にリュックを背負い、やはり自転車で時に無線で交信するなどして見回りをする男女の若者がいて、接触や衝突で転倒してけがをした人がいれば、そこでガーゼや消毒液などを出して手当している。

あちこちに屋台が出て、腹が減ったり、のどが渇いたりした人は自転車から降りて新鮮な果物ジュースを飲み、エンパナーダをかじる。その横では自転車屋が臨時営業をしていて、パンクの修理やタイヤの空気入れをする。犬を連れている人のためには動物愛護団体がテントを張って犬の水飲み場を確保し、時にはその場で獣医が不妊手術まで引き受ける。

感心したのは、単に車道から車を締め出すということにとどまらず、このようにスポーツ、レクリエーションの場として安全に楽しめるよう配慮が幾重にも施されている点だ。

滞在中の 2014 年 12 月 15 日は、その ciclovía が始まってから 40 周年記念日に当たり、新聞はイベント

とともに、回顧記事も載せた。いろいろと調べ、帰国前に市スポーツレクリエーション局取材してみても、ciclovía は「車は金持ちの乗りもの、自転車は貧乏人の乗りもの」とみられていたボゴタの社会に深く根差した「文化革命」だと理解できた。

事の発端は、車の洪水をなんとかせよ、空気を汚すな、もっと娯楽の場を、と若者ら 5000 人が市中心部の一角を自転車で埋めた抗議行動だった。これには市交通局の協力もあった。その 2 年後、市長は条例を制定し、自転車・歩行者の専用道路 (cicloruta) をつくること、日曜・祝日に車道の一部通行止めにして自転車に開放する (ciclovía) ことを決めた。さらに発展させて今日の「ボゴタ・モデル」ともいうべき形に整えたのが 1990 年代半ばに登場した 2 人の市長で、とりわけ「社会的平等の実現」をうたい文句にして、都市づくりを進めたエンリケ・ペネロサの功績が大きいとされる。

3000 ドルの車を運転する人も、30 ドルの自転車に乗る人も、ボゴタ市民として平等だ。しかるに車道は金持ちが乗る車に占有されている。歩行者や自転車に便宜を図るべきではないか。渋滞解消に多額の建設費のかかる高速道路や地下鉄をつくるのはやめ、公共交通システムと自転



(写真は、すべて筆者撮影)

車網を整備して、車に乗っている市民が公共交通機関を利用するように仕組みを変えればいい。

ペニャロサはこう考え、車道を削って、主要道路の中央部はトランスミレニオの専用レーンとし、500~600mごとに駅を置いた。ターミナル駅には無料の駐輪場を設け、駅から離れた地区に住む住民にはアクセスできるように無料バスを運行することにした。

2000年に始まったこのBRT (Bus Rapid Transit) システムの導入で、市の調査によると、利用者の職場・学校までの所要時間が短縮し、大気汚染の度合いも減った。

市はあわせて2000年2月、ノー

カーデーの実験をした。そして市民の賛成多数で2002年から毎年2月の第1木曜日は「マイカー追放」の日となった。これにより、ボゴタは世界で初めてノーカーデーを定着させたという榮譽に浴することになる。

いま、自転車専用道は東京・名古屋間の鉄道距離に匹敵する350kmに伸び、今後4年間でさらに150km延伸する計画がある。ciclovíaの利用者は140~160万人を数える。

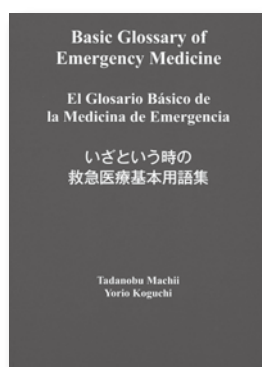
貧困対策も視野に入れた「自転車効果」で大気汚染は減り、自転車道路への投資1ドルに対し3ドルの医療費の節約になるとの地元大学の調査結果も出た。車優先社会から環境

にやさしい持続可能な社会へ。ボゴタの挑戦は世界の注目を集め、自転車天国、ノーカーデーは米国、カナダやメキシコ・ブラジル・チリなどラテンアメリカ諸国にも広がっている。

とはいえ、ボゴタの車の渋滞は簡単には収まらない。根本的な解決策として地下鉄建設計画が持ち上がっては膨大な建設費をどう捻出するかなどの難問の前に、先送りされてきた。そこへ、2015年10月の市長選であのペニャロサの再選が決まった。車 vs 自転車。「剛腕」復活で、どちらの車輪が回るのか。

(こざと ひとし 元朝日新聞中南米特派員)

ラテンアメリカ参考図書案内



『いざという時の救急医療基本用語集 Basic Glossary of Emergency Medicine. El Glosario Básico de la Medicina de Emergencia』

町井 紀之・古口 徳雄 五曜書房発行・星雲社発売
2015年9月 145頁 2,300円+税 ISBN-978-4-4342-0730-3

本書編纂の目的は、①日本在住の英語・スペイン語圏人、②英語圏在住スペイン語圏人あるいは日本人、③スペイン語圏在住の英語圏人・日本人が、緊急入院した時に必要な基本用語を、緊急医療、脳・心臓疾患、感染症を中心に、一般医療、臨床検査、薬剤・消毒、解剖学も含めて8つの場面・状況毎に整理して実用に供しようとするものである。それらについて、英語・スペイン語・日本語(ローマ字表記・漢字)の順に用語が載っており、それぞれの言語での索引からも引くことが出来て、使い勝手のよい有用な用語集になっている。

編者の町井氏はペルー国立ラ・モリーナ農科大学を拠点に長く水産技術指導に当たってきて、現在同大学名誉教授。古口氏は千葉県救急医療センター診療部長として救急治療の第一線に立っている専門家。

(桜井 敏浩)



『高齢期の所得保障 - ブラジル・チリの法制度と日本』

島村 暁代 東京大学出版会

2015 年 10 月 頁 7,200 円+税 ISBN978-4-1303-6147-7

高齢期の社会保障の中核である公的年金制度は、それを単独で云々するのではなく、雇用・企業年金や公的扶助等と総合的に見なければならぬが、それぞれの国の事情、歴史的経緯などから、実態はかなり異なっている。本書は比較法の観点から、国家主導で現役世代への賦課で高齢者年金を支えるブラジルと、民営化された制度の下で積み立てに拠る個人主義のチリを比較・考察したものだが、それによって日本の制度改革に資するものにしたいという意図もある。

日本とははるかに現役時代の所得格差が大きい両国では、高齢期においてもその格差が引き継がれているが、これを無理に縮小させることの是非、年齢自体は要件としていないブラジルの状況から年齢が就労能力との関係でも年金制度設計上重要であること、積み立て方式をすでに 30 年間維持しているチリの経験など、わが国のこれからの制度を考えていく上で大いに参考になる問題提起を行っており、有益な示唆を得られる労作である。

〔桜井 敏浩〕



『日系移民社会における言語接触のダイナミズム - ブラジル・ボリビアの子供移民と沖縄系移民』

工藤 真由美・森幸一 大阪大学出版会

2015 年 8 月 318 頁 6,500 円+税 ISBN978-4-87259-512-3

日本人移民の現地での言語接触と言語移行についての研究書は少なくないが、本書は戦前のブラジル移民の半数近くを占めた子供と、ブラジルやボリビアで多い沖縄からの移民を取り上げ、長期にわたる現地での言語生活と談話の録音調査、文献の掘り起こしの集成に基づき分析したものである。

子供移民は日本語・ポルトガル語という二つの言語文化にあって、一世大人とも現地生まれの二世とも異なる自らのアイデンティティを模索してきた。沖縄系移民については、日本人（沖縄県人）、ブラジルの日本人（コロニア人）、ブラジルのウチナーンチュ、さらには「汎ウチナーンチュ」になるというエスニックアイデンティティの変遷を経てきたことを、沖縄方言も含めて彼らの言語接触の経験を考察している。

資料編にはボリビアの沖縄系移民コミュニティにおける談話録音調査の一部を DVD-ROM で聞くことが出来るようになっており、近年の日本への長期デカセギと日本での子弟教育、現地での高学歴化（大学進学）という変化までも追っていて、これまでの北米の日系移民研究成果を持ち込んだ南米調査・分析と一線を画した研究になっている。

〔桜井 敏浩〕